



天野進吾が視る。語る。今日のできごと。まつりごと。

38年ぶりのニューヨーク

先月の終わりに8泊10日の日程で県議会の北米視察が実施され、私も団の一員として参加しました。この日程の中で私は実に38年ぶりに「ニューヨーク」を訪ねたのです。

「摩天楼」と表現される高層ビル群は遙か昔の淡い記憶ではありましたが、一歩足を踏み入れる時、懐かしい記憶の数々が確実に甦ってくれました。振り返れば、昭和44年、未だ貧しき「日本」から、単身乗り込んだ20代の訪問者にとつて、ブロードウェイの賑やかさ、エンパイーステートビルの荘厳さは将に夢、幻として脳裡に刻まれたところです。しかし一方、ニューヨークに冠せられた「犯罪の街」という烙印は当時、全くの一人旅のわが身にいたずらな緊張感も抱かせ続けたのでした。

変貌するニューヨークの町

ところが38年後に再び巡りあったその「暗黒の街」は、何時しか衣替えし、夜間でも一人歩きのできる「平和な街」へと変身していったのであります。そしてこの革命的変革こそ実に、ひとりの為政者の懸命な努力の賜物だったのであります。

街を甦らせた人こそ、前ニューヨーク市長、ルドルフ・ジュリアーニその人です。検事出身の彼は如何なる犯罪にも徹底した対応を図るべく、「割れ窓理論」を展開、たとえ小さな犯罪といえどもそれを無視することによって住民の治安意識は低下し、その結果、凶悪犯罪の増大を招くとの発想から、例えば、かの有名な「地下鉄」の無賃乗車に対しても徹底した取締りを執行、今日では誰もが安心して乗車できる市民の足となったのであります。



激減する犯罪

こうして94年には40万件あった重犯罪発生数は05年には13万件に激減、ジュリアーニ退任以降も犯罪数は通減し続けているのであります。そのことはこの街を訪れた誰もが実感できる貴重な財産となったのであります。

つまるところ、ジュリアーニ市長の徹底した防犯対策がニューヨークの患部を摘出し治癒したのであります。

このことから「誰が当選しても同じだ」と嘯く訳知り顔の選挙民に、このニューヨーク市の成果が為政者の姿勢如何でどのようにも変えることが出来ることの明快な証であると思ふ次第であります。そうした意味で来年の市長選挙、県議選は極めて重要な選択の時でありましよう、私も気合を入れて頑張つて参りますので御後援のほど宜しくお願いします。

物理学の巨匠と巨匠

過日、家内の手伝いで、借りている倉庫の掃除に出かけたところ、山積した本の中に、ノーベル賞を受賞した小柴教授から頂いたサイン入りの「ニュートリノ天文学の誕生」という小冊子が出てきました。

思えば平成3年の初夏のことです。市長室で稟議書を見ている最中、突然ひとり、しかし雰囲気の良い初老の男が秘書課の応待を待たずに、心持ち笑みを浮かべながら「市長さん、こんにち、ホトニクスの書馬です」と自己紹介しつづつ入ってきたのであります。

勿論、その名前は夙に承知の私はその来訪を歓迎しながらも、「今日は何でしょう、昼間から」とその時の気軽な雰囲気に合わせて、ジョークを交えてお迎えました。

応接の椅子に腰掛けるや「今、井川へ行ってきました」冒頭に切り出したその言葉は著名な、しかも大企業の社長の言葉としては極めて頓狂でしたが、それから続く書馬氏のお話は「宇宙研究のメッカ」を本市の「井川」に構築しようとするという壮大なロマンでした。

しかし余りにも稀有な壮大な氏のお話は残念ながら凡夫の私の脳裡には具体的に思い描くこともできませんでした。

この出会いを契機にその後、書馬社長には何かとご昵懇を戴いて今日に至りました。

井川の天と地と

それから1週間後の午後、また予約もなく突如、白髪の紳士が執務室を訪れるや、予め用意した名刺を、極く自然に、応対した私に差し出しました。

そこには「東京大学名誉教授・小柴昌俊」と記されていました。私はその肩書きの大きさに戸惑いながらも、腰をおろした小柴教授に訝しげに「今日は、何でしょう？」と尋ねました。

「今、井川に行ってきました」そのフレーズを聞いた時、何故か私は気が楽になって、即座に「先週、全く同じ言葉を聞きました」と遠慮なく返答したところ、「それは書馬君のことでしょう、彼の研究は上空を見るでしょうが、私は地下を探っています」恰も弱弱問答でもしているかと錯覚するこの初対面での会話は、その後も「群盲象を撫でる」の諺通り私には全く理解できない世界でした。

会話の途中、氏が私に一冊の小冊子を取り出し、決して上手とは云えないサインを添えて「是非、この本をご参考に」と言いつつ既述したニュートリノ理論の冊子を出されました。

勿論、天文学においては「巨人」と称されるこの御両人の壮大な構想は門外漢の私ではあります、その実現にはもとより天文学的建設費を伴うものと直感しております。

さて、あの日から瞬く間に10数年が経過しましたが、書馬氏の推薦した県内で夜間、最も人工の光のない、即ち天文台の設置に恰好な地である「井川」には、残念ながらあの時の構想の欠片すら発見することはできません。

実は、その後、書馬氏の描いた巨大天文台構想はご存知の方もありませんがあの「ハワイの天文台」としてデビュー、また小柴教授のニュートリノは「岐阜のカミオカンデ」の一層の充実によってそれぞれ目的は達成され、ひいては小柴教授の「ノーベル物理学賞」の授賞につながったのであります。

丸山町と焼失した東雲神社

昨年11月、原因不明の火災で丸山町の「東雲神社」が焼失しました。殆どの市民はこの新聞報道で、初めて浅間神社の脇にそんな神社があったことを知ったでしょう。

新聞には「ルビ」がつけられていないので、読者は「東雲」を何と読んだでしょうか。音読みすれば「とううん」、訓読みすれば難しい読み方だが「しこのめ」、実は私がこの原稿を書き出した時には「しこのめ」と理解しておりましたが、偶然、その前日、浅間神社の村上宮司にお目にかかり「とううん」と読むことを知りました。その根拠は明治8年に東照宮と八雲神社を合祀して東雲神社が誕生した経緯からも「とううん」神社が正式な呼称とのことでした。

新聞とはいえ固有名詞については是非「ルビ」を付けて頂きたいと思えます。読めない漢字に直面すると端折ってしまう習慣は誰にもあります、私がこのレポートを記述する際、積極的に漢字にルビを入れていたのは、読者に嫌われないための方便でもあります。

ところでこの東雲神社は、「丸山の権現さん」と地域の人々から親しまれてきました。が権現とは徳川家康の尊称、実はこの神社は「家康」を祭る神社であり、浅間神社とは無縁の独立した神社なのです。

余談になりますが、徳川家康はその遺言によって久能山に葬られ、この時代以来、久能山東照宮の呼称が生まれたのです。

ところでこの際、何故「東の雲」と書いて、「しこのめ」と読むのか、その理由を書き添えておきます。

昔の庶民住宅の壁面は篠竹によって雨露を流していました。この篠竹の網目からさす木漏れ日を「目」と見立て、ここから『篠の目』の言葉が生まれ、更にこの光が早朝、東の空に薄雲を通して見る光に例え、「しこのめ」を風流に「東雲」の文字を当てたとのこと。

一寸一言 私 雑記帳から

スチュワードエピソード

私が東中学に在籍していた時代、それは遙か昔、未だ戦後の貧困の時代を映していたが、昼食時間に流れていた学校放送は既に鮮やかな音量で各教室に届けられていました。

しかしその内容は時に学校長や生徒会の説話であったり、放送部員の他愛ない企画もの等で、否応無く聞かされ、静粛を余儀なくされる生徒たちにとっては決して楽しいものではありませんでした。

そうした校内放送で、屢々試みられた企画が生徒による作文朗読でした。「私の将来」「私の家族」など表題は殆どが「一人称」、それ故、これを聞く生徒にとっては殆ど聞き流す程度のものでした。ところが或る日、「私の夢」と題した松永繁子さん(唐瀬街道でご家族と惣菜店かつ見を経営の作文は、「池塘春草の夢」に酔う中学生に新鮮な輝きを脳裏に刻んだのでした。

「スチュワードエピソード」……時代を風靡していた大映映画の中で「菅原謙次と若尾文子」が航空機のなかで出会

ところで丸山町の町名は徳川家康によると伝えられております。本誌の「静岡の歴史②」でも記述しておきましたが、人質時代の家康は折々に、臨濟寺において義元の叔父大原雪斎の手ほどきを受けました。その通学路として鷹匠の松平邸から北街道を下り、先ず横内の先宮神社にお参り、次に安東の熊野神社、更に長谷通りの若宮神社、そして浅間神社と順次お参りしながら臨濟寺に向いました。

その道中、浅間神社の脇から見る駿府の街の様子は、後に天下人となって京都「丸山」から見た京の町並みと似ていることから家康がこの地を「丸山町」と名付けたと伝えられております。

うシーンは日本人にとって憧憬にも似た夢の世界でした。そのスチュワードエピソードの世界を自らの掌中に考えている同級生が居たことに私は驚き、今でも記憶しております。

処でこの度、県議会の海外視察団の一員として、北米を訪れました。その飛行機の中で、既述した校内放送を思い出したので。乗客に笑顔で温かな「おしぼり」を配るスチュワードエピソードに「有難うと応えながら、ふと、今では「スチュワードエピソード」との表現は、不適切用語になったことを思い出したのです。

「スチュワードエピソード」とは英国語の steward (豚小屋とward(見張り))と女性を示すess、即ち「豚小屋の見張り番」との意味です、そうしたことから近年は「スカイ・アテンダント」とその呼称を変えつつあると聞いておりましたが、アメリカの国内路線の中で横綱「曙」並みの重量感溢れる乗客に右往左往しながら昼食を配る彼女らの姿を見た時、私は「スチュワードエピソード」という造語に痛く納得し、改めてその言葉を変更する必要はないと思っただ次第でした。



彩時記

今時のお中元事情

そろそろお中元の季節。「中元」の起源は、古代中国道教の星祭「三元節」から。三元とは1月15日の「上元」、7月15日の「中元」、10月15日の「下元」を指します。「中元」は日本のお盆の時期と重なり、先祖の供養と共に両親や年長者が正月から中元まで無事に過ごせたことを祝い、素麺(そうめん)などの食べ物を贈る習慣に発展したようです。

ひと昔前のお中元といえば、定番の贈り物を会社の上司や得意先に数多く贈るのが一般的でした。しかし、終身雇用制が減って会社の人間関係が薄れてきた昨今は、プライベートで親しい人にだけ、こだわりのあるお中元を贈る傾向が強まっています。贈り物の内容も、産地直送の逸品やレストランの食事券、ホテルの宿泊券など多様化しています。贈り先の数は減っても、贈り物の中身は以前より充実しているのではないのでしょうか。親しい人、お世話になった人の喜ぶ顔を思い浮かべながら、さて、今年は何を贈りましょうか。

歴史講座のお知らせ

町内会の集會、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。嬉しいことに最近、グループや町内会などで「天野進吾」の歴史講座の要望が増えて参りました。このSHINGO—SCOPEの郷土史が好評ですのでその現れかもしれません。どうぞ、お気軽にお声掛けください。